

2022年度 学位論文

論文のすゝめ  
For Theses, With Theses

理工学研究科理工学専攻情報学領域

博士前期課程

B1234567

上智花子

指導教員 上智太郎

2023年1月30日

<sup>1</sup>Sample Mode.

<sup>2</sup>Copyright 2022-2023 Leo Liu. All Rights Reserved.

# 目次

第1章	はじめに	1
第2章	論文の体裁	2
2.1	ページ設定	2
2.2	本文	2
2.3	フォントサイズ	2
2.4	文献の引用	2
2.5	図・表について	2
2.6	数式について	3
第3章	本ファイルの利用について	4
3.1	執筆言語	4
3.2	論文題目・学生氏名	4
3.3	定義・定理などの定理型環境と末尾の処理について	4
第4章	おわりに	5

# 第1章 はじめに

このファイルは L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を利用して情報理工系修士論文・卒業論文を作成するためのサンプルファイルである。本ファイルに記述してある指示に従い、その中身を書き換えることで要旨を作成することができる。

Overleaf で使用する場合、コンパイラをデフォルトの pdfL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ではなく、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X に設定した上で使ってください。

## 第2章 論文の体裁

### 2.1 ページ設定

基本は横書きで記述し，分量は各教員・研究科・学科の指示に従うこと．2種類のページサイズが用意されている．

- **コンパクトモード**：用紙はA4サイズ(210mm × 297mm)縦置き，ページ余白は上：25mm，左右・下：20mmとする．余白は少なめ．要旨などに．
- **デフォルトモード**：report または jreport クラスのデフォルトページサイズ．余白は多め．製本用論文正文などに．

### 2.2 本文

2段組みか，1段組みで執筆すること．詳細は各教員・研究科・学科の指示に従うこと．

### 2.3 フォントサイズ

フォントサイズは10ptに設定されてあります．

### 2.4 文献の引用

文献の引用は，thebibliography 環境またはBIB $\TeX$ を利用できる．

引用した文献は参考文献に明記し，引用箇所には [1], [2], [1-3] のように文献番号を表記すること．参考文献の表記方法については指導教員の指示に従うこと．

### 2.5 図・表について

表の挿入は，tabular または tabularx 環境を利用できる．

図・表には図 2.1，表 2.1 のように図表番号をつけ，タイトルとともに，図は下部，表は上部に記すこと．

表 2.1: 表のタイトル

請求書		
品名	数量	金額
<i>The <math>\TeX</math>book</i>	1	\$30.00
<i><math>\TeX</math>: The Program</i>	1	\$43.00

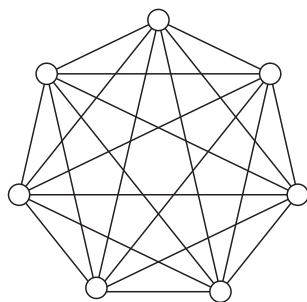


図 2.1: 図のタイトル

## 2.6 数式について

数式には必要に応じて式番号をつけること。数式の例を以下に示す。

$$H = - \sum_{i=1}^n p_i \log p_i \quad (2.1)$$

$$E(X) = \sum_{i=1}^n x_i P(X = x_i) \quad (2.2)$$

$$V(X) = E((X - E(X))^2) = E(X^2) - (E(X))^2 \quad (2.3)$$

## 第3章 本ファイルの利用について

### 3.1 執筆言語

論文を英語で記述する場合は、本ファイル先頭の「環境設定」の中にある指示に従って処理すること。

### 3.2 論文題目・学生氏名

論文題目・学生氏名は、本文の titlepage 部分に書き入れること。また、本文を英語で書く場合、題目・学生氏名とも英語で記載すること（ただし、指示に従うこと。）。なお、副題（英語論文の日本語タイトル、またはその逆）も環境設定で設定の上、titlepage 部分に書き入れること。

### 3.3 定義・定理などの定理型環境と末尾の処理について

定義 (Definition), 定理 (Theorem), 命題 (Proposition), 補題 (Lemma), 系 (Corollary), 注意 (Remark), 例 (Example) などは定理環境を利用すること。

本ファイルでは「定義・定理・命題」のマクロを用意してあるので、必要があればそれを利用すること。また、これら3つの定理型環境の末尾に□を出力するマクロを用意してあるので、本ファイルの環境設定の指示に従って有効・無効を切り替えること。

独自に作成した定理型環境内で□を出力するマクロを使用する方法は、本ファイル先頭にある「修正不要」の中の「定理型環境」を参考にすること。

**定義 1** 定理型環境 (definition) の利用

**定理 1** 定理型環境 (theorem) の利用

**命題 1** 定理型環境 (proposition) の利用

## 第4章 おわりに

本稿では、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  により論文を作成する際の留意事項について解説した。ここに記載されていないことについては指導教員に確認し、その指示に従うこと。

## 関連図書

- [1] W. Fulton, “Young tableaux,” London Mathematical Society Student Text **35**, Cambridge, 1996.
- [2] J. Hong and S-J Kang, “Introduction to Quantum Groups and Crystal Bases,” American Mathematical Society, 2002.
- [3] A. V. Zelevinsky, “A Generalization of the Littlewood-Richardson Rule and the Robinson-Schensted-Knuth Correspondence,” J. Math. **69**, pp.82–94, 1981.